

日高市発達障害通級指導教室わかたけ・たかはぎ

7 月号 | 1学期を振り返って



1学期の間に相談があった困り感について簡単にまとめてみました。困り感を解決するにはその原因や子どもが置かれている環境、そして学校でできる合理的配慮の限度を考える必要があります。

1. 子どもたちの困り感と保護者の困り感、担任の困り感

(1) 子どもたちの困り感

① 教室の中に自分の居場所がない。

- ・ 大勢の同学年の子どもたちということ自体、刺激が多すぎて疲れてしまう。ふだんから一人遊び、一人での行動が多く、周りに関わることで自分が大きなストレスとなる子。周りの目、周りからの評価に敏感で、とても気持ちが繊細な子に多いようです。
- ・ 活動、行動を時間で区切って行うことが苦手である子。過集中の子は集中すると時間を忘れて一つのことに集中し、周りの動きが気にならなくなってしまいます。気が付くと自分だけ他の子と違うことをやっていて、仲間に入れなくなっています。周りの人に邪魔されない自分の世界がある子に多いようです。
- ・ クラス、教室の中に気になる人、気に嫌いな人がいる場合。同じ空間で目を合わせるだけで不安ストレスを感じてしまう場合があります。この不安を取るのには時間がかかりますが、座席の工夫や声掛けの工夫、共同作業の工夫で1年ほどかけると不安がある程度薄れてきます。

② 先生の指示や説明が理解しにくい。

- ・ 子どもによって、目からの情報の処理が得意な子、耳からの情報の処理が得意な子がいます。また継次処理（情報を順番に処理する）が得意な子と同時処理（全体をまとめて処理する）が得意な子がおり、前者は手順や時系列に沿った理解が得意、後者は図やイメージで全体像を一気につかむことが得意といった違いもあります。ワーキングメモリー（短期記憶）が少なく、一度に多くのことを覚えられないとか、忘れやすいため、長い計算や説明が理解できない事もあります。他にもいろいろな原因がありますが、教室で一斉に同じことを説明しても、自分の苦手な説明の仕方ですと理解が進みません。自分はどんな学び方が得意なのか、また苦手なのかを本人だけでなく、教師も保護者も理解していなければなりません。

③ 友達とうまく付き合えない。

- ・ 一般的な社会ルールを知らないとか善悪の判断がつけられないとかで周りの子

とトラブルが多い。幼児期の経験や生活環境、行動特性が主な原因です。いろいろな場面を経験しながら、ルールや正しい行動を学んでいく必要があります。大変時間がかかります。

- ・ コミュニケーション力が低いため、言葉で相手に自分の意志をうまく伝えられず、または相手の意志がうまく理解できず、身体表現で相手に意思を伝えようとしてします子もいます。いわゆるすく手が出てけんかになるといったことです。コミュニケーション力は耳や目の機能的な問題だけでなく、言語力、情緒の安定などの問題も関係してきます。

④ 宿題ができない。

- ・ 子どもたちの中には、ワーキングメモリーが低いため、学校では課題の解き方がわかり、自力で問題が解けるのに、家に帰ると学習した内容やその問題の解き方を忘れてしまって、自力ではその課題が解決できないということが多いようです。低学年ですと学習内容や問題の解き方をノートに自分で書くことも少なく、また自分のノートを見ても自力で問題を解くまでには至りません。宿題ができないからやらないというのが本当のところではあります。結局、家でもう一度学び直しをしなくてはなりません。やらないと次の日またわからなくなってしまうのです。

(2) 保護者の困り感

① 子どもの学校での様子と家での様子が違う。

- ・ 「家ではおとなしく、親の言うことも聞き、兄弟とも仲良くできるのに学校ではどうしてトラブルが多いのでしょうか。」とか「家ではよく話し、自分の考えを言えるのに学校ではどうして黙っているのでしょうか。」といった話を多く聞きます。当然ながら学校と家では環境が違うからです。教師は全体に向かって指示を出しますが、家庭では本人に向かって親が指示を出します。全体に指示や説明がされたとき、子どもによっては、自分に指示が出されたとは認識できないことがあります。なぜならば、教師が自分の顔を見て自分の分かる話し方で聞きたいタイミングで言ってくれなかったからというのが理由です。集団で話を聞く態度は学校でしか学べません。時間をかけて身に付け、慣れるしかありません。
- ・ 学校、学級では言葉によるコミュニケーションしか友達とつながる手段はありません。家庭では不完全な言葉でも親きょうだいとコミュニケーションが取れますが、友達や先生とは言葉によるコミュニケーションしか取れません。もし言葉が間違えていたり、正しく伝わらなかったりするとよい関係が築けません。
- ・ 「自分のことは自分でやる。」学校は一人一人の自立を目指していて、失敗してもできるだけ自分でやることは挑戦するような環境を作っています。本人が困る前に手助けをすることは、原則として行いません。

② 学校での出来事を、家で話さない。

- ・ 子どもは自分が学校での出来事を話すことによって「快」または「楽」になる場合は話しますが、そうでない場合は話しません。もし話したとしても事実を話さないことがあります。ましては話すとは叱られることは正直に話すことはありません。昔

の子もそうです。子どもの中には学童での出来事はとても詳しく話すのに、クラスでのことは聞かれても「何もない。」という子もいます。話した後どうなるかを子どもは考えています。

③ 家庭学習に取り組まない。

- ・ ほとんどの子は家庭学習が大事なことをわかっています。しかし、なかなか宿題やろうとはしないし、親の言ったとおりに家庭学習に取り組むもうとはしません。宿題は子どもが主体的に行う一人学習です。教師が行う授業とは違い、子どもにいかに主体性を持たせるかがカギとなります。いつやったか、どれだけやったかより、まずは自分ができることを自分からやるように計画を立てさせることが大切です。失敗を繰り返しながらでも、学習を習慣化させることです。
- ・ ワーキングメモリーが低く学校での学習を忘れてしまった子は家庭での一人学習はできません。家庭でもう一度、学び直しが必要です。そんな時は必ず担任と相談して、学び直す内容、やり方を確認してください。家族の協力が必要です。放っておけません。

④ 生活リズムが不規則。

- ・ わかただけでは毎回、朝起きた時刻を報告してもらっていますが、子どもによっては毎回、大きく違う子がいます。子どもの話によると、「毎回寝る時刻が違うため、起きる時刻が違う。」というのですが、それはもっともらしい嘘です。寝る時刻は違っても起きる時刻は毎日同じにすることができます。原因は、朝起きてから学校に行くまでのルーティーンは確立されていないからです。家を出るまでに必要なことを確実に入れ、時間設定をして、それを崩さないことが大切です。家族の協力が不可欠です。

(3) 担任の困り感

① 教師の指示や説明が聞けない。

一度に30人近くの子に指示や説明をしても、話を聞いていない子、一回の話では理解できない子、最後まで話を聞かずに動き出してしまう子がいます。視覚と聴覚の両方を使って指示や説明を工夫していますが、なかなか子どもたちに伝わっていきません。その原因としては、

- ・ 子どもが話を聞く構えができていないこと。
- ・ 話す内容、言葉が難しく、その年齢の子には理解が難しいこと。
- ・ 子どもが話を聞いた後どうするかの見通しが持てず不安になること。

が挙げられます。

話を聞く構えは授業の中だけでなく、ふだんの生活の中で身に付けるものです。話し手が話をすぐ始めるのではなく、相手の顔を見て、一呼吸おいて話し始めるのも話し方の工夫です。

② 集団での活動に参加しない。

学年や学級で、みんなで行う活動に参加できない子が何人か見られます。原因として考えられることは、次の通りです。

- ・ 集団での活動が苦手のため。
- ・ 今、自分のやりたいことをやっていて、それがやめられない（過集中）のため。
- ・ 大きな集団の中だと自分のやることがわからないため。

などがあります。個別の支援が必要なため、人手がなく、子どもを無理に行動させても学校が嫌いになってしまいますので仕方がなく、無理をさせないでおこうと思ってしまいますが、小学生のうちに集団での行動を体験し、慣れておかないと大人になってからの自立が遅れてしまいます。医療の専門の先生からも、学校と保護者が協力して、子どもに集団行動の体験を多くさせてほしいといわれています。

③ 身の回りの整理整頓ができない。

- ・ 子どもが、どこに何を置いたか、どこに何を置くべきか忘れてしまうため、いろいろなところにいろいろなものを片付けようとして散らかってします。持ち物がよくなることがある。どこに何を置くかを絵や言葉で書いて掲示しておくことが有効です。
- ・ 視覚情報の処理と物の分類の苦手さから、使用頻度や用途で物を分けることができない子もいます。整理の仕方を教え、それを繰り返すことで慣れさせます。周りが一緒に整理を手伝ってあげることも有効です。

④ 危険な行動を取ることがある。

- ・ 衝動性の高い子は時に危険な行動をとることがあります。興奮すると先の見通しを持たず行動を起こしてしまいます。興奮させないようにすることが一番で、興奮する原因を作らないのがいいのです、行動を起こす前に自分が何をしたいのかを言葉にすることを習慣化するのが有効だといわれています。
- ・ 経験不足から危険な行動を理解できていない子もいます。特に自閉的な子はたとえや類似が苦手なため、直接それがどう危険か、どの程度危険かを日膾一つ教えていく必要があります。

2. わかたけ通級での活動

- (1) 1学期わかたけでは、児童一人一人の特性や課題、伸ばしていきたい行動を把握する活動を行ってきました。子どもの持つ課題も特性も一人一人全部違います。また、保護者の願い、担任の願いも違います。これから 2 学期に向け、一人一人の課題に合った指導計画、教材を用意していく予定です。
- (2) 来年度通級希望者に対して、本人、保護者との教育相談を始めます。原則平日の午後 2 時から 4 時 30 分ごろなら対応できます。担任を通して申し出てください。